ダンスについて書くということ

～舞踊的知性に魅せられ、表現してきた二十年～

佐々木涼子

二〇〇九年六月に、さつき会（東京大学OG・女子学生同窓会）で話をしたときの記録です。直後の「さつき会報」に掲載されたものを、少し書き直しました。

お話をいただいた時、何を話そうか、とても悩みました。東大を出た女性に（失礼！）バレエの話？　どのくらいバレエを観たことがあるかしら？　どんな生活をしていらっしゃるのだろう？　いろいろ考えてしまいました。

私の舞踊論の授業では受講生がたくさん集まるのですが、どうも話が聞きたいというよりは、ビデオを観たいという顔をしている。ですので、今日はバレエの映像、この十年ほどで「これは観てよかった」と思った作品を選んで持ってきました。あまりバレエをご覧になったことのない方にとっては、「これがバレエ？」と思うようなものもあるかと思います。この会場の機材はあまり複雑なことができないもののようですので、話をする後ろで映像を流しておき、途中で適宜ご説明も入れるという形で進めたいと思います。

■言葉にならないが確かに存在する舞踊的知性

さて、ダンスのお話です。ルネサンス期のヴェニスに面白い言葉があり

ダンスについて書くということ

ます。「歌って踊れれば憂いなし」。憂いがないというのは、楽しいということでもありますが、それ以上に、子どもがいい学校に入れたからもう大丈夫という時のような、それがクリアできればまず将来は安泰だというニュアンスでもあったと思われます。

バレエという芸術は十六世紀、絶対王制を準備しつつあったフランスで成立するのですが、似たようなパフォーマンスは、ルネサンス期からイタリアやイギリス、フランスなどの諸侯の宮廷で、祝賀の祭典や晩餐の合間のエンターテイメントとしてさまざまに催されていました。学校のないこうした時代、上流階級では、たくさんの人が集まるパーティで身分にふさわしい品格のある振舞いができ、すばらしい歌が歌えて、みんなが感心するようにダンスが踊れたらもう一生心配がない。歌や踊りができることは、その人の知性や資質を評価する基準だったわけです。

いっぽう私たちの育った日本は、今日ではかなり変わってきてはいますが、それでもまだまだ学力テストに重きを置く社会であって、知性といえば一般的には勉強ができることとされています。

ですが、それとは別の知性、「舞踊的知性」とでもいうようなものが、確かに存在するのです。難解な数学がパーッとわかる知能があるように、ダンスの分野でも、どうしてこんなことが可能なのだろうかと思えるような見事なダンスがあって、そこには言葉にできないけれども確かに知性的なものがあり、その人の世界観がクリアに提示されている、そういうものに触れることができたという感動があります。そのくせ、神様としか思えないようなすばらしいダンサーが、話を聞いてみると意外に言葉では自分の考えを表現できなかったりして、びっくりすることもあるのですが…。ある領域で優れている人がほかの領域でも優れているとは言えないのだなと、つくづく思い知らされます。

■舞踊評論を書くようになったわけ

私は子どもの頃からバレエをやっていて、ほんとうは舞台を観るよりは自分で踊るのが好きなのです。高校時代からバレエでギャラをいただいて

ダンスについて書くということ

いましたし、続けていれば、トップクラスとは行かないまでも、かなりいいところまで行けたのではと今でも思ったりするのですが、なぜバレエの道に進まなかったかというと、学力のほうを評価する社会だったからだと思うのです。親も周囲の人も大学に行くのが当然と思っているような環境でしたし、その当時の、大学を出た人とバレエダンサーとの社会からの扱いや評価の差を、自分でも感じていたのだと思います。

大学では仏文学を専攻して、マルセル・プルーストが専門です。研究職は時間がありそうでいいなと思って進みましたが、正直に言えば研究よりは、文章を読んだり書いたりするのが好きだったんですね。なので二十世紀で最も難解な文学といわれる作家プルーストについて勉強しながら、小説について考えていました。いったい小説って何だろうか、文章はどうあるべきなのだろうか、いわゆるいい文章をどこまで崩すことができるのだろうかと、ヌヴォー・ロマン隆盛の時代でしたし、そんなことを考えていました。

実はバレエについて書く前は、日本舞踊に熱中していたんです。そのお稽古をちょっとお休みしていた時に、たまたま俳句を始めたところ、句会の主宰が当時『東京新聞』の文化部長をしていらした方で、帰りが同じ方向だったもので、「プルーストが専門なのにどうして俳句を?」と尋ねられ、「以前バレエをやっていて、最近まで日本舞踊に打ち込んでいたのですが、表現方法や空間の捉え方、体の使い方が本当に正反対というほど違っていて、それがちょうどプルーストと俳句についても言えるようなんです」とお答えしました。そうしたら、それ面白いから書きませんかと。

こうして書いた新聞記事が人の目にとまって、原稿の注文が来たんです。それまで学会誌に書いても何も出ませんでしたけど、舞踊論では次々に依頼があって、もしかするとその僅かな原稿料につられて書いてきたのかもしれません。

こんなわけで、書きはじめたのは偶然からでしたが、ダンスについて書くことへのモチベーションはもうひとつありました。世の中の舞踊について書かれたものがまったく物足りないようにように思えたのです。あの感

ダンスについて書くということ

動的な舞踊的知性を少しも伝えていない。舞踊評論などは音楽評論のアネックスといった感じで、本当に低く見られていました。ですから、ダンスについて書きませんかと言われた時、言葉にならないけれども確かにあるあの舞踊的知性を何とか表現したい、言葉でどこまで舞踊に迫れるだろうか、これはものを書くという意味での挑戦だと強く思ったんです。「小説を書くならわかるけど、なぜ舞踊評論?」と言う人もいましたが、「自分自身の文章能力の挑戦です」と答えると納得してくれたものです。

その当時、一九九〇年代は、ちょうど戦後何度目かの舞踊ブームでもありました。舞踊に対する関心が非常に高まっていて、新聞でも原稿用紙五枚、『ダンスマガジン』などの専門誌では十枚から二十枚くらいの原稿を書かせてくれました。それだけの枚数があると、かなり掘り下げて書くことができるんですね。舞踊というのは身体の表現ですが、同時に文学や美術などとの関わりがあり、社会構造との響き合いがあります。時代的に遡ってフォローしていくと、とても面白いことが見えてくる。そんなことを自分でもいろいろ発見しながら、夢中になって書いてきました。

それまでの舞踊評論にはなかったものを打ち出してきたという自負も多少はあって、舞台を観た時の感動の核心のようなものをどう書いたらいいんだろうと悩みながら、工夫して工夫してやっとたどりついた表現。ここはというところは自分でも踊ってみたりして、そうするとその動きが持っているリズムをつかむことができるんです。それを何度も書き直して…。

言語能力とか論理的思考力とかいわれる知的なものとは別の、誰にもまねのできないすばらしいダンス ―優れたアスリートや音楽家もきっと同様だと思いますが― そうした舞踊的知性、言葉にはならないものを、言葉によって表現し、人に橋渡しをする、そんなことを思って書いてきたのかなと思います。

■総合芸術として成立したバレエ

バレエというと、トウシューズを履いて、チュチュのようなひらひらした衣装をつけて踊るものというイメージを持っていらっしゃる方もいるか

ダンスについて書くということ

もしれません。しかしバレエというのは、その時代時代、社会と呼応しながら常に進化してきた芸術です。成立した当時は、装置などの美術と音楽、それに台詞としての詩、それからダンスという四つの芸術が融合した、ちょうど歌舞伎のような総合芸術でした。

これは、ようやく国家統一を成し遂げたばかりのフランスで、しかしまだまだ国王の権力は脆弱であるがゆえに、「力のある諸侯が国王の下、ひとつの国家を作り上げよう」という理念を体現していたと言われています。つまりバレエは王制を称揚する壮大なデモンストレーションであったわけです。それが十八世紀に、音楽の部分は別個に発展してオペラになり、ダンスの部分は体の動きだけで物語を表現するところまで高められて、現在のバレエへの流れが作られました。

トウシューズにチュチュをつけたバレリーナによるロマンティックな舞台というのも、じつはバレエの歴史の中で十九世中葉から二十世紀にかけてのほんの一時期のものにすぎないのです。私自身はもともとかなり頭の固い、バレエといえばロシアバレエが80％を占めていた古い時代のバレエ少女でしたから、その後、舞踊について書くことを通じて、アーティストが全身全霊をこめて創造してきた新しいもの ―ダンスはもちろん、美術に関しても音楽についても― に常に触れていることができたことは、とても幸せだったと思います。

■私のダンス評価の基準

ふだんはあまり理屈っぽいことは言わないのですが、この機会に、舞踊を評価する時の私なりの基準というのを考えてみました。それは①規範、基本の動きができていること、②音楽性、③文学的テーマ、④美しさ、という四つにまとめることができます。

①の規範とは、基本的な体の動かし方の原則のことです。私自身はバレエと日本舞踊をやってきましたが、こうした古典舞踊というのは、それぞれ違うんですけれども、同じように基本原則を持っています。例えば、どちらも「真っすぐに立つ、体の軸は真っすぐ」というとを原則にしている

ダンスについて書くということ

のですが、ただ、その真っすぐの定義に、ジャンルごとの違いがあるんですね。歩くのも、バレエの場合一本の線の上を歩きますが、日本舞踊ですと、男踊りと女踊りで多少違いはあっても、踵の間に握りこぶしひとつ分くらいの余裕を置いて歩く。つまり二本の平行線の上を歩きます。ですから、バレエをやっていた感覚で真っすぐに立っているつもりでも、日本舞踊の先生から見ると真っすぐになっていない。「踊りは真っすぐに立つことが肝心です」と言われて心外でした。自分ほど真っ直ぐな者はいないと自信を持っていましたから。このように、ジャンルごとに違いはあれ、それぞれに決められた正しい動きというものがあるので、それが正しくできているかというのがまず第一です。

なぜこの基本が必要かというと、この点がしっかりしていないと、次の高度な動きができないからです。工学をやっていらっしゃる方はおわかりだと思いますが、前後左右のバランスが取れた安定した形は、荷重に対して最も優れています。右からも左からも上からも下からも、あらゆる力に対して安定度が高い規範に則った体の動かし方が身についていればこそ、難しいことができる。軸がしっかりしてると、それを土台に楽々と、さらに難度の高い動きができるようになります。

面白いのは、人はこうして修練によって形成された、あるいは無意識に持たされた身体観ですべてを見たり感じたりするということです。たとえばバレエの場合、重心はみぞおちですが、日本舞踊では丹田に置きます。天才的な舞踊手であったニジンスキーは「世界中の踊りを見たが、重心はすべてみぞおちだった」と書いていますが、じつはそうではなく、舞踊ジャンルによって身体観と世界観がまったく違うんです。私も日本舞踊をやらなかったら、バレエ流の「すべての舞踊はみぞおちに重心がある」という世界観に留まっていただろうと思います。同じことが、宗教にもイデオロギーにも言えるのではないでしょうか。

②の音楽性というのは一番わかりやすいと思いますが、多くの場合、舞踊には音楽があって、その音楽との響き合いによって、同じ動きの陰影がまったく違ってきます。従って、その人の音楽に対する解釈が非常に大き

なポイントになるということです。

それから③の文学的テーマ。舞踊というのはただ体を動かしているだけでなく、そこに何かしらの文学的なテーマがあり、精神的な何かが付与されているものです。それは長編小説のような壮大なストーリーを持ったものであることもあるし、五七五だけで表現される俳句のような、たとえば「夏の夕暮れの小川のほとりに立った時のような感じ」というような、一種の雰囲気だけの場合もあります。一見、抽象的な作品のように思えても、体の動きを通じて、言葉ではないけれども言葉の芸術が持っているような感動を与えてくれるものが、芸術としての舞踊なのです。ま、それも私が言葉にこだわる人間だからかもしれませんが。

そして、それらの要素の先に、美しいと言えるものを創り出しているかどうか。④の「美」というのは、ファッションと同じで、じつは常に変わっていくものです。その時々で新鮮な感動を与えるものというのは不変ではないんですね。それにお金を払って観る舞台が去年と同じだったら、誰も二回、三回とは行かないでしょう。このような経済的な観点からも当然、見たことのないものを打ち出していく必要があるのですが、それ以上に、人間というのは変わらずにはいないものです。自分の中を探りながら、暗中模索しながら、血を流して新しいものを生み出していく芸術創造であってこそ、未来と関わるというほどの意味を持つのではないかと思います。

変わるのならよい方向に、自分の感覚も作品の意匠も、十年後の自分がよりよいものになる方向に行かなくてはならない。一観客としてもそう思います。どんどん新しい試みをやって、新しいものを探り、打ち出してほしい。そうは言っても、実際に長く舞台を観ていると、新しい新しいと言っても、あれはすでに六十年代にやったことだなと感じることもあります。「日の下に新しきものなし」という心境に、私もなりつつあるのでしょう。

■バレエ、進化し続ける芸術

ちょうど今、流ししているビデオがいい場面に来ましたね。『La Bella』のオーロラ姫が今、坂を降りてきます。これです、すてきでしょう？　ダ

ダンスについて書くということ

ンサーが透明のシャボン玉のような大きな風船の中に入っています。大事に大事にされて、深窓に育ったお姫様ということをこうして表現しているんでしょうね。舞台で観た時は、よく考えたなと感心しました。

原作ではオーロラ姫が指に針を指して眠りにつくのですが、バレエではそれが社交界デビューの場面になっていて、求婚者たちと出会うことになっています。で、この風船に穴を開けて出てくるのですが、こんな風船の中にいたら苦しいんじゃないかと思いますけど、演出としては、外に出て、つまり現実にふれて、息が苦しそうなようすをします。周りにいる求婚者たちの動きもかなり斬新。「えっ？　これがバレエ？」とお思いになりませんか。

次のビデオに移りましょう。

これは、昨年来日公演して話題になったパリ・オペラ座の『Le Parc（ル パルク）（庭園）』です。アンジュラン・プレルジョカージュという新進の振付家によるもので、『クレーブの奥方』という小説にインスピレーションを得て創られました。

『クレーブの奥方』はラファイエット夫人が書いたフランス最初の小説とも言われるもので、十六～十七世紀の華麗なブルボン王朝文化が描かれています。人びとが不義不倫の限りを尽くしている宮廷で、クレーブ公の奥方は、すばらしい人に愛されながらも最後まで許さず、修道院に入ってしまうというお話です。夫のクレーブ公は、最愛の妻が他の男に心を奪われたことを知って、苦悩のあまり死んでしまうのです。

ちょっと横道にそれますが、恋愛は十二世紀の発明だということをご存じですか？　もちろんそれまで男女が結ばれなかったわけではなく、こどもが生まれなかったわけでもありませんが、芸術に恋が登場するのが十二世紀という意味です。それまでは人は自然の欲求を恋というふうに、あるいは恋という言葉で意識しなかったのでしょうね。現実にあるものも、認識しなければ無いも同様なのです。

恋も病気と同じで、世に出はじめの頃はすごく症状がきつく、好きな人の前に出ると顔面蒼白になって昏倒してしまったりしたんです。ウイルス

はだんだん弱くなってきますから、今日では恋患いで人が死んだりしませんよね？　でも、昔は恋で人が死にました。『クレーヴの奥方』はそんな時代のお話しです。

　このバレエ『Le Parc』の舞台装置はちょっと変わっていて、四角錐の鉄製の置物が三つ。私も初めは何のことかよくわからなかったのですが、これはベルサイユ宮殿の庭園の木だと思います。ベルサイユ宮殿の樹木は幾何学的に剪定されていますので、それをデザイン化した装置でしょう。

　そして、このサングラスの男たちは庭師、狂言回しの役割です。演出もそうですけれども、振付が本当に新しくて、直線的な変わった動きをしています。この変則的な動きは日本舞踊にはよくあるのですが、ナンバといって、右足を出す時に右手が前に、左足を出す時に左手が前にという動きです。江戸時代までは、日本ではふつうに見られた動きだそうですが、それが今では、歩く時は手足を互い違いに出すという西洋的な動きがすっかり定着してしまいました。いまナンバをやってみると変な感じです。

　このシーンの男女の集団のダンスはすごく面白い。服装は宮廷風ですが、でも現代的なところもあって、女性も男の格好をしています。お互いに関心を持ちながら、気にしないような顔をして椅子取りゲームをしている。チラっと見て、さっと離れていく、男と女がお互いに関心を持ちながらさりげないふりをする。邦楽の詞章によくある「見るようで見ぬようで」ですが、古今東西同じですね。このプレルジョカージュという振付家はなかなかスタイリッシュで、独創的なアイデアの持ち主。深層心理を描くのに長けていて、私は大好きなんですが、日本ではなぜか人気がいまいちです。

　原作の小説では、夫が亡くなってもう障害はないにもかかわらず、クレーブの奥方は相思相愛の男性を拒んで修道院に入ります。がバレエでは、最後は二人は心を通わせ、着ていたものをかなぐり捨てて、下着姿ですばらしいパ・ド・ドゥを展開します。けれども、残念ながらいまはビデオデッキは早送りができませんので、次の作品に移りましょう。

■スターとは、人間性の輝き

ダンスについて書くということ

映像をぜひ観たいというご要望が高い熊川哲也さんですが、これはローラン・プティという振付家の『若者と死』という、一九四六年初演の作品です。古い作品ですが、振付には今でもインパクトがあります。なにしろ難しくて、これを完璧に踊ったのはバリシニコフと、日本では熊川哲也さんとあと一人、くらいでしょうか。残念なことに彼は怪我をしてしまって、実物はもう観られないかもしれません。今は映像が残りますので、ダンサーも幸せです。ほんの数十年前までの人たちは、ただレポート記事や絵が残るだけでしたから。

この熊川さんも、先ほどお話しした基本という意味ですごい人です。バレエの原則に則った上での超絶技巧。もちろんバレエはそれだけではなく、音楽性や、文学的に何を表現していくかということが問題になりますが、どうも最後は踊っている人の人間性が決め手になるみたいです。特にスターはそうで、熊川さんの場合も、ファンに言わせると、十五、十六で言葉も満足でないのにひとりで海外に行って、あんなにがんばって、東洋人で初めて英国ロイヤル・バレエ団に入団し、史上最年少でプリンシパルになって、と……。彼の舞台を観ている人は、熊川哲也というダンサーを見ながら、彼の周りにまとわりついているストーリー、観ている人が演技から想像したその人間性に惚れ込んでいる。それは見る人の自己投影なのかもしれないのですが、それがスターなのですね。

それは、たとえば建築などでも同じなのかもしれません。最終的には人間を観る。私は夫が建築家で都市計画をやっていたので、若い頃は建物を見に行くのにずいぶんつき合わされましたが、建築も、やはり空間から何か受け取るものがあって、それは私の場合、一種の文学作品のようなもの、長編小説のこともあれば俳句のこともあるけれど、その建築家の人間性なのではないかなと思ったものです。技術的なことがわからないだけよけいに、そんな感じ方をしたのかもしれませんが。

バレエも、結局はダンサー個人に感動して、好きになったダンサーからバレエの基本的なイメージを受け取ることが多いみたいです。だから、どのダンサーでバレエファンになったかで、バレエ世代や好みが決まったり

します。ジョルジュ・ドンでファンになった人、ギエムでファンになった人、マルシア・ハイデでファンになった人……。ファンの人は、いろいろ他を観ても「それにしてもプリセツカヤはよかった」と、各自の原点に戻っていくみたいです。

■「林住期」にさしかかって

最後に、同窓会ということで近況めいた話を少し。最近、老後についてしっかり考えなくてはと思っているのです。いまの日本には、生涯現役というか、できるかぎりずっと仕事をするのがいいという風潮もあるようですが、ある時、テレビで宗教学者の山折哲雄さんが「林住期」ということを話していらして、すてきだと思いました。林の中に住む、つまり社会から少し離れたところに身を置いて自分を充実させていくと。人生には二十五年だか三十年ごとに区切りがあるのだそうですが、私も就職が三十一歳の時でしたので、自分流に解釈すると、三十年学び、それから三十年社会で働いて家族を持ち、そしてそのあと、ちょうどこれからが林住期になるのです。

実を言うと、お話をいただくまで「さつき会」のことはあまり知りませんでした。大学一年の時に東大女子学生の会というのに誘われて、迫力ある先輩方に圧倒されて以来、そういう集まりからはなんとなく距離を置いていたのですが、でも今日はとても楽しかったです。皆さんの一分スピーチがすばらしく興味深くて、もっと聞きたいなと思っていると「チン」と鳴ってしまって、残念でした。

まあ舞踊について長年書いてきましたけれど、全国紙でも分量は原稿用紙二枚。そうするとあまり深いことは書けません。編集の方との詰めでもいろいろ妥協やがまんをしないといけない部分もあり、苦心惨憺してひねり出した表現は次々といろんな人が使ってしまう。身過ぎ世過ぎだなあという気分になっていましたところに話をする機会をいただいて、いろんな先輩方のお話も伺うことができ、すごく参考になりました。ありがとうございました。

ダンスについて書くということ